

山梨大学における景観・デザイン教育の現状と展望

山梨大学 正会員 ○石井 信行

1. はじめに

現在、山梨県では富士山の世界文化遺産の早期登録に向け、住民、関係者との協働により、世界遺産にふさわしい景観づくりに向けた取り組みが進められている。これに合わせ、山梨県は平成24年1月30日に、景観づくりの全県的かつ継続的な取り組みを推進する「美しい県土づくり推進会議」を設立した。一方で、県内27市町村の中で平成25年1月1日現在の景観計画策定状況は、山中湖村、北杜市、南アルプス市、忍野村、甲府市、甲州市の6団体（国土交通省HPより）に留まっている。このように、景観づくりが急がれるにも関わらず県内の景観計画策定が遅れている要因の一つは、市町村に景観が分かる職員がいないということであり、地域貢献が一つの重要な役割となっている地方国立法人大学である山梨大学にも、人材育成および直接的なサポートが期待されている。

本稿では、山梨大学工学部土木環境工学科における景観・デザイン教育について、学習プログラムおよび地域活動を報告する。

2. 山梨大学における景観教育の体制

山梨大学は、4学部と大学院の5つの研究科・教育部および複数のセンター等からなる。平成24年5月現在の学部生は約4,000人で、この内筆者が教育を担当する土木環境工学科には307名が在籍している。本学科は、ここ数年で定員を漸次削減しており、平成24年度新入生から55名となっている。

本学科では24名の教員が教育を担当し、景観工学を専門とするのは筆者1名である。山梨大学全体では、景観工学を専門または専門の一つとする教員として生命環境学部の北村眞一教授と大山勲教授の2名がいるが、本学科の景観・デザインに関わる授業には関わっておらず、所属学部にも景観の授業は無い。

3. 土木環境工学科における景観・デザイン教育

本学科では、水資源と防災を柱と位置付けているために、必ずしも景観・デザインに関係する授業が充実しているとは言えない。現在、カリキュラムの中で提供されている授業を表-1に示す。これらの内、エンジニアリングデザインI、IIでは、景観に関することを演習課題に加味できるという程度である。

表-1 景観・デザインに関する学部授業

授業名	形式	期別	担当教員	内容
土木環境デザイン	演習	1年次 後期 必修	1名（筆者）	土木図面の基本知識を学ぶと共に、構造物や空間の基礎的な表現手法(図学)、デザインの基本的な考え方(デザイン論)、およびコンピュータを用いた設計支援手法(CAD)を修得する。
エンジニアリングデザインI	演習	3年次 後期 必修	5名 (筆者含む)	道路の幾何設計を中心とした道路整備計画または河川・下水道・流域の特性を踏まえた管理施設の計画・設計の演習をグループで行う。
エンジニアリングデザインII	演習	4年次 前期 必修	6名 (筆者含む)	橋梁の桁部材の詳細設計を中心とした道路構造物の設計または下水関連施設を中心とした都市基盤施設に関する計画・設計の演習をグループで行う。
景観工学	講義	3年次 後期 選択	1名（筆者）	景観工学の枠組み、歴史から始め、景観計画や橋梁、街路といった各論について理論と事例を紹介する。広場や遊歩道等、具体の公共施設の景観デザインを課題レポートとしている。

キーワード 景観，デザイン，教育，カリキュラム，地域活動

連絡先 〒400-8511 山梨県甲府市武田4-3-11 山梨大学大学院医学工学総合研究部 TEL055-220-8597

これらに加えて、大学院修士課程では景観工学特論の講義がある。

4. 地域プロデュース活動

本学科では、卒業・修了制作の制度はなく、卒業・修了研究を学生に課している。景観研究の機会はあるものの、学生の中には景観分野に興味があっても、研究ではなくまちづくり等の活動を志向する者が多く、そのようなニーズの受け皿として、学生が主体となる地域プロデュース活動の組織 NPDL を平成 19 年に立ち上げた。メンバーは本学科の学生に限定せず他学部、他大学からの参加も認め、10 人前後で推移している。

NPDL は、山梨大学を始め 4 つの大学が立地する甲府盆地の将来像として「環境学園都市」を提案し、地理的・自然環境的・歴史的な魅力を生かし発展させるために、大学と地域とがコラボレーションして複数の施策およびプロジェクトを立案・実行することを活動目的とし、学生が実践を通じて景観・デザインの能力を高める場となっている。

様々な活動の中で特に景観・デザインに関わる活動として、高校生まちづくりワークショップと甲府市景観まちづくり検討業務がある。前者は、高校生が自身の高校周辺の歴史と現状および個々人と地域との関わりを理解するためのワークショップを運営するもので、高校生を指導するために学生メンバー自身がそれらを理解する必要がある。後者は、甲府市景観計画において先導的景観形成地区と定められた 4 地区における、現況調査、アンケート調査、ワークショップ運営を行うもので、景観法を学んだ上で学生が報告書の原案作成まで行う。

5. 成果

必修の授業では、多様な興味を持った学生が受講するために反応は様々であり、授業アンケートでは満足度に両極端な評価がある。景観工学については、授業アンケートで、「興味が深まった」「景観の見方が変わった」という回答を得ていること、また卒業時に行った学科のアンケート調査で、記憶に残っている授業として景観工学が上がることから、景観・デザインの理解を深めることに關して一定の成果があると考えられる。

地域プロデュース活動の高校生ワークショップについては、県内の複数の高校で実施し、スーパーサイエンス高校に選定されている 1 校からは 4 年間継続して実施依頼を受けており、その実績が評価されていると言える。甲府市の検討業務についても、3 年間継続して委託を受けており、市の景観計画書に報告書の一部がそのまま掲載されていることから、評価を受けていると言える。また、本活動に参加した学生の多くは、都県庁、市役所または大手の建設コンサルタントに就職しており、地方の建設会社や工務店への就職が多い本学科において特徴を示している。

6. 課題

平成 20 年度入学生まで本学科で 1 級建築士試験の受験資格を得ることができたので、デザインに関心のある学生が各学年の 3 分の 1 程度おり、主に彼らが景観・デザインに関連する授業に熱心に取り組み、演習作品の質も高いものがあつたが、平成 21 年度以降に入学した学生については明らかに関心が低く、作品の質も低下している。そのような状況に合わせて、景観工学の授業においては景観デザイナーを輩出するよりも、常に景観を意識する土木技術者を育成するという方針を変更した。このことは、社会が 1 学年の定員が 55 名の地方大学に対して景観工学を専門とする学生をどれほど期待するかという問題であるので、学科の運営方針を変えない限りは容易に状況が変わることはないと考えられる。

7. まとめ

山梨大学土木環境工学科における景観・デザイン教育は、大学の規模、学科の方針、地域特性といった制約条件の下での一つの在り方として紹介した。今後の展開のためには、海外を含めて大学を越えた連携や、潜在的な本学科への進学者である地元の小中高生に対する啓発活動が必要であると考えられる。

参考

・NPDL ホームページ： <http://www.cec.yamanashi.ac.jp/~nobupdlabo/>